

副院長就任のご挨拶

この度、4月1日より外科系担当副院長を拝命した心臓血管外科の渡辺祝安です。

自己紹介いたしますが、出身は函館で函館ラサール高校(8期生)を卒業するまで函館で過ごしました。1978年に札幌医科大学(25期生)を卒業し、新任の小松作蔵教授の主宰する札幌医科大学胸部外科に入局しました。当時は心臓、大血管、肺、食道と胸部臓器の全てと末梢血管の疾患を扱っており、全ての手術を経験いたしました。研修病院は、道立釧路病院、道立小児保健センターで、1985年学位取得後すぐ米国に留学し、2年間冠動脈バイパス術の冠血流に与える影響など冠動脈の基礎的研究を行って参りました。1990年より当院心臓血管外科に勤務して前理事の中瀬篤信先生の指導のもと後天性心疾患(狭心症、弁膜症)、大動脈瘤を主に手術を行ってきました。現在の心臓血管外科手術は低侵襲化が図られ、狭心症に対する人工心肺を用いない心拍動下冠動脈バイパス手術、心臓弁膜症に対する人工弁を用いず自己弁温存をはかる弁形成術、大動脈瘤に対しても手術のリスクの高い患者さんに対しては開胸、開腹を行わない血管内



市立札幌病院 副院長

渡辺 祝安

治療であるステントグラフト内挿術が行われており、私もこれらの治療法の変遷を目の当たりにしてきました。

当院は、多くの合併症を持つ患者さんの集約的治療を目指しております。私が所属する循環器センターにおいては、循環器内科医、心臓血管外科医、麻酔科医、薬剤師、看護師、臨床工学技士、理学療法士からなるハートチームが一体となり治療方針の決定、手術、術後管理に当たっております。良質で安全な治療のご提供、治療成績の向上はもちろんですが、当院は地域完結型の急性期治療を行う中核病院として、緊急手術を必要とする患者さんの円滑な受け入れ、手術待機時間の短縮、術後早期の連携病院への転院など、常に連携病院のニーズに答えられるように努力して参りますのでよろしくお願いたします。

PICK UP

市立札幌病院の退院調整について

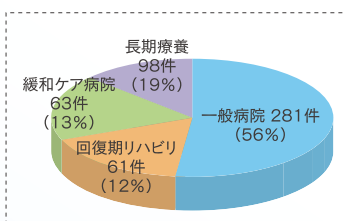
当院では全ての入院患者さんに48時間以内のスクリーニングと5日以内のアセスメントを行い、入院早期から退院調整を開始する「市立札幌病院退院支援調整システム」を運用しています。システムを基盤とし、院内他部門が協働しながら、患者さん家族が「望む場所で望む療養を継続できる」ための調整を心がけています。

がん診療連携拠点病院であることから、緩和ケアを望まれる患者さんの調整も多く、とくに最近では、外来通院中から、「緩和ケア病院」や「緩和ケアを实践する一般、療養病院」などの医療機関へ通院や入院をお願いする調整が増えています。

また、在院日数短縮のなか、急性期治療が終了後、当院の入院期間では直接退院が難しいケースは、在宅(施設含む)復帰を目標とする「地域包括ケア病床」や「回復期リハビリ病棟」などへ転院をお願いする事例も増えています。

地域連携センター 退院調整担当係 相澤 友子

札幌市唯一の自治体病院であり、地域医療支援病院の認可をいただいた当院の役割として、「病気や障害、重度の介護状態となっても住み慣れた地域で生活できる調整」「安全な療養が継続される調整」を目指しています。連携医療機関、各種制度で利用する施設やサービス事業所、制度を超えた地域支援事業の皆様のご協力をいただければ幸いです。



転院先機能内訳 (H25年4月～H26年3月)

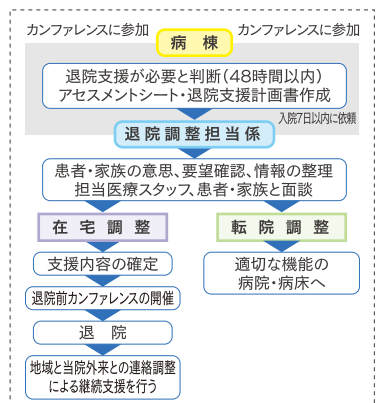


図 市立札幌病院退院支援調整システム